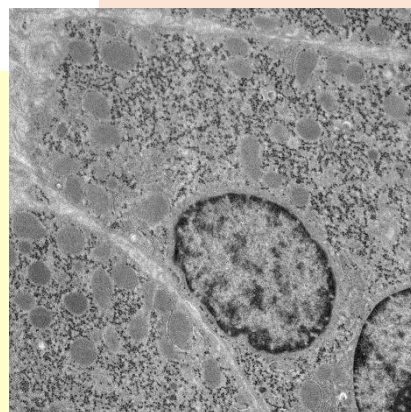
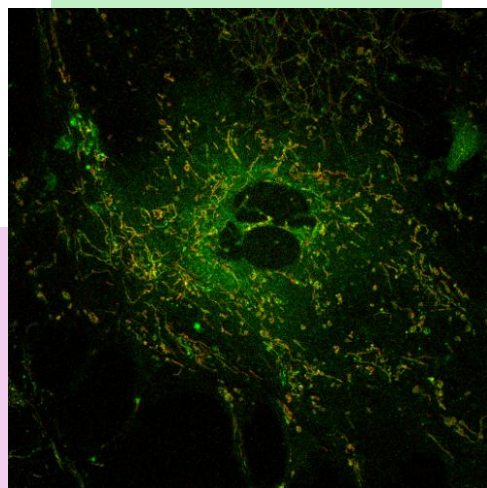
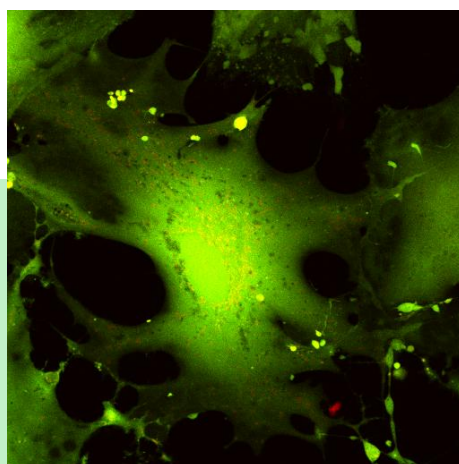
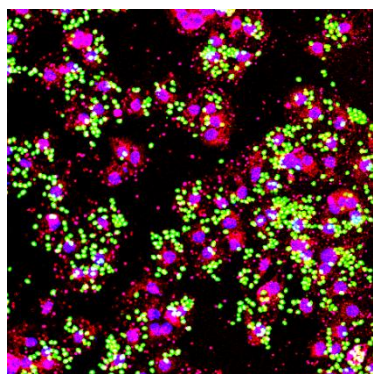


SINUSOID NEWS

Vol.25
2026.Jul



TOPICS

坂井田 功 先生を偲んで

山口大学大学院医学系研究科 消化器内科学 教授 高見 太郎

The Liver Sinusoid Meeting 2026 に参加して

肝類洞壁細胞研究会 代表世話人

順天堂大学大学院医学研究科消化器内科学 教授 池嶋 健一

大阪公立大学大学院医学研究科グローバル教育・医療学 准教授 Le Thi Thanh Thuy

順天堂大学大学院医学研究科消化器内科学 准教授 内山 明

坂井田 功先生を偲んで

山口大学大学院医学系研究科 消化器内科学

教授 高見 太郎

坂井田功先生のご逝去の報に接し、未だ深い悲しみの中におります。

先生は2005年に山口大学大学院医学系研究科 消化器内科学 教授に就任され、約16年にわたり教室を率いられました。その間、肝疾患診療、肝線維化研究、再生医療、鉄代謝研究、肝疾患センターの設立など、多方面にわたり我が国の肝臓学の発展に多大な足跡を残されました。とりわけ、自己骨髄細胞を用いた肝臓再生療法は、基礎研究から臨床応用まで一貫して取り組まれたライフワークであり、多くの研究者や臨床医に夢と希望を与えました。私はその研究の一端を担わせていただけたことを、生涯の誇りとしております。

肝類洞壁細胞研究会とのご縁も深く、2012年には第26回肝類洞壁細胞研究会学術集会を山口で主宰されました。肝類洞を構成する細胞間相互作用や微小環境の重要性を早くから捉えられ、「基礎と臨床をつなぐ研究」の大切さを常に説かれていました。その理念は現在の肝線維化研究や再生医療研究へと確実に受け継がれています。



私にとって坂井田先生は、研究者としてだけでなく、一人の医師としての在り方を教えてくださった恩師でした。「橋を作って渡るのは面白い」「雑用は買ってでもしなさい」「論文を書きなさい」「お天道様は見ているよ」。先生が折に触れて語られたこれらの言葉は、今でも私の判断の拠り所となっています。研究には挑戦する勇気が必要であり、人として誠実であることが何より大切であることを、先生はその背中ですべて示してくださいました。

私自身、NIH 留学から帰国した後、坂井田先生のもとで再生医療の研究に本格的に携わる機会をいただきました。新しい治療法の開発には数多くの困難がありましたが、先生は「橋を作って渡るのは面白い」と、いつも私たち若い世代の挑戦を温かく後押ししてくださいました。その言葉に励まされながら研究を積み重ね、自己骨髄細胞を用いた肝臓再生療法は、現在の医師主導治験「自己完結型肝硬変再生療法」へと発展しています。また、2015年に寺井崇二先生の後任として肝臓班チーフを拝命した際には、「高見君らしくやりなさい」と穏やかな笑顔で送り出してくださいました。その一言には、責任を託す厳しさと、若手を信じて見守る先生の温かさが込められていたように思います。これから新たな研究や教育の節目を迎えるたびに、私は心の中で先生に問いかけたいでしょう。「これで良いでしょうか」と。そして先生は、あの優しい笑顔で「面白いじゃないか、やってみなさい」と背中を押してくださいような気がしています。

2026年6月、「坂井田功先生を偲ぶ会」を開催し、多くの門下生や関係者の皆様とともに先生を偲ぶ機会を持つことができました。会場には終始穏やかな空気が流れ、先生のお人柄の大きさを改めて実感いたしました。お姿はなくても、その教えや志は、それぞれの弟子の心の中に確かに息づいています。

先生から受け継いだ志を未来へとつなぎ、肝臓病学と再生医療のさらなる発展に尽力していくことこそ、残された私たち門下生の使命であると信じております。その歩みを、どうかこれからも天より温かく見守っていただけますようお願い申し上げます。

坂井田功先生のご冥福を心よりお祈り申し上げます。

合掌



The Liver Sinusoid Meeting 2026 (スペイン・タラゴナ)

2026 年 5 月、スペイン・タラゴナにおいて The Liver Sinusoid Meeting 2026 (第 23 回肝類洞壁細胞国際シンポジウム、ISHSR 創立 50 周年記念大会) が 5 月 23 日から 26 日にかけて開催されました。本会では肝類洞研究の最新成果が数多く発表され、世界中の研究者との活発な議論が繰り広げられました。今回はスペインでの開催ということもあり、日本を含むアジアからの参加者は例年より少ない印象でした。一方で、米国を中心に研究活動を行っている日本人研究者の参加も見られ、若手研究者が国際的な研究コミュニティで活躍の場を広げていました。本 SINUSOID NEWS では、現地で撮影した参加者の集合写真とともに、ご参加いただいた先生方からの参加報告を掲載しております。

なお、本会期間中に開催された総会において、次回第 24 回肝類洞壁細胞国際シンポジウムの大会長を拝命し、2028 年 10 月に東京で開催することが正式に決定いたしました。肝類洞壁細胞研究会のテーマである “Cutting-edge science in hepatology through hepatic sinusoidal research” のもと、肝類洞研究を通じて肝臓学のさらなる発展に貢献できる会となるよう、また、会員の皆様が国内にしながら世界最先端の研究に触れ、新たな共同研究や交流が生まれる機会となるよう、研究会関係者の皆様とともに準備を進めてまいります。ぜひ多くの会員の皆様にご参加いただき、日本開催とともに盛り上げていただきますようお願い申し上げます。

今後とも肝類洞壁細胞研究会へのご支援、ご協力をよろしくお願い申し上げます。

(肝類洞壁細胞研究会 代表世話人 池嶋 健一)



The Liver Sinusoid Meeting 2026 参加記

大阪公立大学 大学院医学研究科 グローバル教育・医療学
准教授 Le Thi Thanh Thuy

このたび、2026年5月23日から26日にかけてスペイン・タラゴナで開催された The Liver Sinusoid Meeting 2026 (第23回肝細胞壁細胞国際シンポジウム、ISHSR 創立50周年記念大会)に参加する機会をいただきました。歴史と地中海の風情あふれる美しい街タラゴナにて、世界中から集う肝細胞研究者と最新の知見を共有できたことは、私にとって大変貴重な経験となりました。本会を主催された大会長 Jordi Gracia-Sancho 先生をはじめ、組織委員会ならびに事務局の皆様にご心より御礼申し上げます。

今回、私は初日のセッションにおいて、光栄にも Presidential Selected Oral (会長選出口演)として発表の機会を賜りました。演題は「Dynamic Macrophage-Stellate Cell Interactions Define Fibrosis Reversibility and Post-SVR Risk in Chronic Liver Disease」です。本研究では single-cell fixed RNA-seq (FLEX) を用いて、肝線維化の進展と退縮の過程におけるマクロファージと肝星細胞 (HSC) の相互作用 (crosstalk) を解析しました。単球由来マクロファージ (MoMac) が発現する SEMA4D が活性化 HSC 上の Plexin B1/B2 を介して線維化を促進すること、また線維化に伴って出現し改善とともに減少する LMCD1 高発現 HSC 集団が AKT-PRAS40-4EBP1 経路を介して活性化することを見出しました。さらにヒト検体 (MASLD および C 型肝炎) において、SEMA4D と LMCD1 の発現は線維化の重症度と相関し、SVR (持続的ウイルス学的著効) 後に HCC を発症しなかった症例では低下する一方、HCC を発症した症例では高値が持続しており、線維化退縮および SVR 後の肝発癌リスクを評価するバイオマーカー候補として有望であることを報告しました。発表後には多くの先生方から示唆に富むご質問・ご助言をいただき、今後の研究を進めるうえで大きな励みとなりました。



本大会では、肝類洞内皮細胞（LSEC）の生物学、肝免疫、線維化、肝癌、そして新たな治療戦略に至るまで、最先端の研究成果が数多く発表されました。招待講演やチュートリアル講演はいずれも示唆に富み、セッションの内外で交わされた活発な議論を通じて、多くの新しい知識を得るとともに、世界各国の研究者と新たな友人・共同研究のつながりを築くことができました。

学術的な内容に加え、タラゴナの豊かな歴史と文化に触れられたことも忘れがたい思い出です。世界遺産にも登録された古代ローマ都市タラコの面影を色濃く残すローマ円形闘技場（まるでローマを訪れたかのような壮観でした）、ローマ時代の城壁が今も残る考古学の散歩道（Passeig Arqueològic）、そして荘厳なタラゴナ大聖堂を巡ることができました。ISHSR 創立 50 周年を祝う晩餐会（ガラディナー）では、半世紀にわたる研究の歩みと国際的なつながりを参加者一同で祝いました。滞在したホテルからはこれらの歴史的な名所と穏やかな地中海を一望でき、毎朝、海から昇る素晴らしい日の出を眺めることができました。

近い将来、再びタラゴナの地を訪れる機会に恵まれることを心より願っています。今回の経験を糧に、今後も肝類洞壁細胞研究の発展に少しでも貢献できるよう、一層精進してまいります。

最後に、本大会の開催にご尽力されたすべての皆様に、改めて深く感謝申し上げます。



「(左)ローマ時代の城壁 / (右)肝類洞研究の仲間たちと」

The Liver Sinusoid Meeting 2026 に参加して

順天堂大学大学院医学研究科消化器内科学

准教授 内山 明



2026年5月23日から26日にかけて、スペイン・タラゴナで開催された The Liver Sinusoid Meeting 2026（第23回肝類洞壁細胞国際シンポジウム、ISHSR 創立50周年記念大会）に、順天堂大学からは池嶋教授、石塚先生、そして私の3名で参加いたしました。本会には、肝類洞壁細胞研究の第一線で活躍する研究者が世界各国から集い、最新の研究成果や今後の展望について活発な議論が行われました。歴史ある街並みと地中海の美しい景観に囲まれた

タラゴナで開催された本会は、学術的にも大変充実した国際シンポジウムでした。本会の開催にあたりご尽力いただいた大会長 Jordi Gracia-Sancho 先生をはじめ、組織委員会ならびに事務局の皆様にご心より感謝申し上げます。

今回の発表演題は、「Portal microbial translocation and hepatic pattern recognition receptor expression in steatotic liver disease」で、ポスター発表を行いました。本研究では、食道静脈瘤治療時に採取した門脈血、末梢血および糞便を用いた 16S rRNA 解析による細菌叢の比較に加え、ヒト肝組織における自然免疫受容体の発現解析について報告しました。門脈を介した PAMPs の肝臓への流入と、それを認識するパターン認識受容体が脂肪性肝疾患の病態形成に果たす役割を明らかにすることを目的とした研究であり、多くの先生方から示唆に富むご質問や貴重なご助言をいただきました。

ポスター発表会場およびランチ会場は、ローマ時代の城壁跡を活用した歴史ある空間に設けられており、大変印象的でした。会場で作りたての本場のパエリアでのランチタイムに続いてポスターセッションが行われたため、多くの研究者と食事を交えながら自然な形で議論を深めることができ、通常のポスター発表以上に充実したディスカッションの機会となりました。今回いただいたご意見は、今後の研究をさらに発展させるうえで大きな励みとなりました。



（本場のパエリア）

タラゴナはバルセロナから車で約 1 時間の港町で、歴史地区には数多くの古代ローマ時代の遺跡が残されています。特に地中海を望む円形闘技場や郊外に現存するラス・ファレラス水道橋は、約 2000 年の時を経た現在も当時の姿を色濃く残しており、歴史の重みを感じさせるものでした。そのような歴史ある地で、肝類洞を構成するさまざまな細胞の機能や細胞間相互作用について最先端の研究成果に触れることができたことは、大変意義深い経験でした。近年、肝類洞を構成する細胞間ネットワークが肝疾患の病態形成に重要な役割を果たすことが明らかになりつつあり、その研究の重要性と今後の発展性を改めて認識する機会となりました。



さらに、本会の世話人会において、2028 年に開催予定の第 24 回肝類洞壁細胞国際シンポジウムを、当科・池嶋健一教授を大会長として東京で開催することが正式に決定しました。今回の開催地であるタラゴナでは、古代ローマ時代の歴史的遺産を活用した会場づくりと地中海の美しい景観が印象的であり、学術集会としての魅力を一層高めていました。この経験を生かし、2028 年の東京大会においても、日本ならではの魅力を発信するとともに、世界各国から参加される研究者が最先端の研究成果を共有し、活発な学術交流を行える実りある国際シンポジウムとなるよう、研究会事務局の一員として準備に尽力したいと考えております。開催までまだ 2 年ありますが、多くの先生方にご参加いただき、東京で皆様をお迎えできることを事務局一同、心より楽しみにしております。



今回の国際シンポジウムへの参加を通じて、世界最先端の研究に触れるとともに、多くの研究者との交流から新たな視点や刺激を得ることができました。この貴重な経験を今後の研究・教育・診療に生かし、肝類洞壁細胞研究および肝臓病学のさらなる発展に貢献していきたいと考えております。

Information

第 40 回肝類洞壁細胞研究会学術集会のご案内

【第 33 回肝細胞研究会 合同開催】

開催日 2026 年 11 月 19 日(木)~21 日(土)

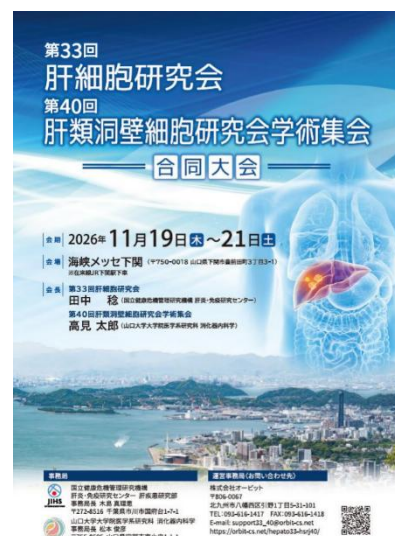
会場 海峡メッセ下関
(〒750-0018 山口県下関市豊前田町 3 丁目 3-1)

開催形式 現地開催

当番世話人 高見 太郎
(山口大学大学院医学系研究科消化器内科学 教授)

学会事務局 山口大学大学院医学系研究科 消化器内科学

運営事務局 株式会社オービット
(〒806-0067 北九州市八幡西区引野 1 丁目 5-31)
E-mail : support33_40@orbit-cs.net
TEL : 093-616-1417
FAX : 093-616-1418



SINUSOID NEWS 編集部

編集長 : 池嶋 健一(順天堂大学大学院医学研究科消化器内科学 教授)

編集委員長 : 内山 明(順天堂大学大学院医学研究科消化器内科学 准教授)

事務局 : 順天堂大学大学院医学研究科消化器内科学内
肝類洞壁細胞研究会事務局

T E L : 03-3813-3111(内線:3609)

F A X : 03-3813-8862

E - m a i l : sinusoid@juntendo.ac.jp

